

## 日本の危機言語・方言 －奄美・沖縄の親族名称・親族呼称－

木部 暢子 (国立国語研究所)

### 要旨

危機言語・方言を保存・継承することの意義を、危機言語・方言が持つ言語の仕組みの点から考えることを目的として、第2節で鹿児島県喜界島方言の「母」「祖母」等の親族名称を取り上げ、日本語では鈴木(1973)の「親族名称の虚構的用法の第二種」のルールが働いているが、喜界島方言では家族構成が変化しても親族名称が変化しない固有名詞的なルールが働いていること、第3節で沖縄県与那国方言の「兄」「姉」の呼称を取り上げ、与那国方言には「弟→兄」「妹→兄」「弟・妹→姉」の3つの枠組みに基づき呼称が構成されていること、すぐ上の兄・姉を呼ぶ名称が存在する点に特徴があることを述べる。

### キーワード

喜界島方言, 与那国方言, 親族名称, 親族呼称

### 1 危機言語とは

2009年2月、ユネスコは“*Atlas of the World's Languages in Danger*” (世界消滅危機言語地図)を発表した。2009年2月20日の朝日新聞夕刊によると、その内容は次のようなものである。

【パリ＝国末憲人】世界で約2500の言語が消滅の危機にさらされているとの調査結果を、国連教育科学文化機関（ユネスコ、本部パリ）が19日発表した。日本では、アイヌ語が最も危険な状態にある言語と分類されたほか、八丈島や南西諸島の各方言も独立の言語と見なされ、計8言語がリストに加えられた。（中略）

日本では、アイヌ語について話し手が15人とされ、「極めて深刻」と評価された。（中略）このほか沖縄県の八重山語、与那国語が「重大な危険」に、沖縄語、国頭（くにがみ）語、宮古語、鹿児島県・奄美諸島の奄美語、東京都・八丈島などの八丈語が「危険」と分類された。ユネスコの担当者は「これらの言語が日本で方言として扱われているのは認識しているが、国際的な基準だと独立の言語と扱うのが妥当と考えた」と話した。



図1 Atlas of the World's Languages in Danger

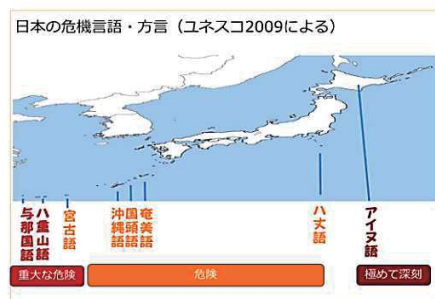


図2 日本の危機言語

図1はユネスコのホームページ (<http://www.unesco.org/languages/atlas/index.php>) から引用した2,500地点の危機言語の地図、図2はそれを元にして作成した日本の8つの危機言語の地図である。この発表のあと、私のところには次のような意見が寄せられた。

1. 八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語は、「～語」というよりも「～方言」ではないのか？
2. 危機の度合の判定はどのようにして行われたのか。
3. 日本には、他に消滅の危機にあることばはないのか？
4. マイナー言語が消滅するのは時代の流れであって、しかたがない。危機言語・方言を守る意義は何なのか。

1については、2つの言葉に相互理解が成り立つかどうか、という規準で論じられることが多い。たとえば、Aの言葉の話者とBの言葉の話者がお互いに相手の言葉を聞いて、発話内容が相互に理解できれば両者の関係は「方言」、理解できなければ異なる「言語」というものである (Chambers, J. K. and P. Trudgill 1980)。ただし、相互理解が成り立っても、その2つの言葉が別の国家に属していれば、2つの言葉を「方言」と呼ぶことはできない。また、2つの言葉のうち一方が社会的、経済的に有力な地域の言葉の場合、もう一方はその言葉を理解することができるが、その逆は少ない (たとえば、青森の人は東京の言葉を理解することができるが、東京の人は青森の言葉を理解することができない)。さらに、離れた2地点を比較したときには相互理解は成り立たないが、2地点の間に分布する言葉を介して、両者が「方言」の関係にあると判断される場合もある。たとえば、青森と東京とでは相互理解が成り立たないが、青森と岩手、岩手と宮城、宮城と福島・・・というように、相互理解が成り立つ言葉が連続的に分布することにより、両者が方言の関係にあるという考え方である (図3)。



図3 連続する方言の分布

結局、「言語」か「方言」かにはさまざまな要因が関係していて、一概に決めることはできないというのが結論である。また、言語学的には「言語」と「方言」を区別することに大きな意味があるとは思えない。それよりも、調査者は、その言葉を話す人の立場に立って調査・研究・言語復興支援を行うことの方が重要である。与論民俗村 (鹿児島県与論島) の菊秀史氏の次のような発言は示唆的である。「私たちにとって、言語も方言も関係ありません。あるのはユンヌフトゥバ (与論のことば) だけです」(2015年 危機的な状況にある言語・方言サミット (沖縄) における発言)。

2と3については、文化庁委託事業報告書(2011～2015)や木部 (2013), 木部 (2018) に詳しく書いたので、それを参照していただきたい。

4の「マイナー言語が消滅するのは時代の流れ」というのは、対応が難しい質問である。実際、言語は変化しながら現在に至っている。変化の中には消滅も含まれる。なぜ、今、危機言語・方言を守る必要があるのか。それに対する明確な答えを出さなければ、ユネス

この発表も効果を発しない。これに関してよく言われるのは、次のようなことである。

- (1) 言語は地域の環境や文化・社会の中で、長い年月をかけて作られてきた。それが消滅すれば、昔からの地域文化のあり方に触れる手がかりを無くしてしまうことになる。
- (2) 言語はアイデンティティ（自分が自分であること）の象徴である。生まれた土地を離れても、言語によって自分のアイデンティティを確認することができる。
- (3) 言語には、コミュニケーションツールとしての役割と知識や思考、感情・感性の基盤としての役割がある。後者によって、人は世界を認識し、さまざまな思考を行い、感情や感性を働かせている。その仕組みの多くは、まだ解明されていない。もし、言語の多様性が失われれば、言語の仕組みや思考・感情の仕組みを解明する手がかりの多くがなくなってしまう。

(1), (2)は比較的分かりやすいが、(3)はもう少し説明が必要かもしれない。以下の節では、言語の多様性が人々の考え方とどう結びついているかの例をいくつかあげてみよう。取り上げるのは、奄美、沖縄の親族名称、呼称である。

## 2 鹿児島県喜界島方言の「お母さん」と「お婆さん」

奄美方言では、「お母さん」のことをアンマーといい、「お父さん」のことをジューという。奄美の最も有名な民謡の一つ、「行きゅんにや加那」に次のような歌詞がある。一番は、愛しい人との別れを唄った内容で、唄の題名もそこから来ているが、それに続く歌詞では、アンマとジューが唄われている。

行きゅんにや加那  
吾が事忘れて  
行きゅんにや加那  
うっ立ちやうっ立ちやが  
行き苦しや

行ってしまうのですか。加那（愛しい人）よ。  
私のことなど忘れて  
行ってしまうのですか。愛しい人よ。  
発とう、発とうとするのですが、  
行くのが苦しくてなりません。

あんまとうじゅう  
長生きしんしょれい  
あんまとうじゅう  
米とうてい豆とうてい  
召上らしゅんど

お母さんとお父さん、  
長生きしてください。  
お母さんとお父さん。  
（私が働いて）米を取って豆を取って  
食べさせて差し上げますから。

ところが、2010年に奄美の喜界島で調査をしたときに、島北部の小野津集落でアンマが「お母さん」ではなく「お婆さん」を表すと聞かされた。別の集落へ行くと、今度はアンマは「お母さん」のことだと言う。どうも、喜界島の中で「お母さん」のアンマと「お婆さん」のアンマが混在しているようである。それを示したのが表1である。

表1 喜界島諸方言の「お母さん」と「お婆さん」

地域	「お母さん」	「お婆さん」
小野津 (おのつ)	オッカー	アンマー
志戸桶 (しどおけ)	オッカー	アンマー
中里 (なかざと)	オツカン	アンマー～アニー
中里	アンマー	アニー
荒木 (あらき)	オツカン	アンマー
荒木	アンマー～オツカン	アンマー～アニー
上嘉鉄 (かみかてつ)	オッカー	アンマー
上嘉鉄	アンマー	アニー

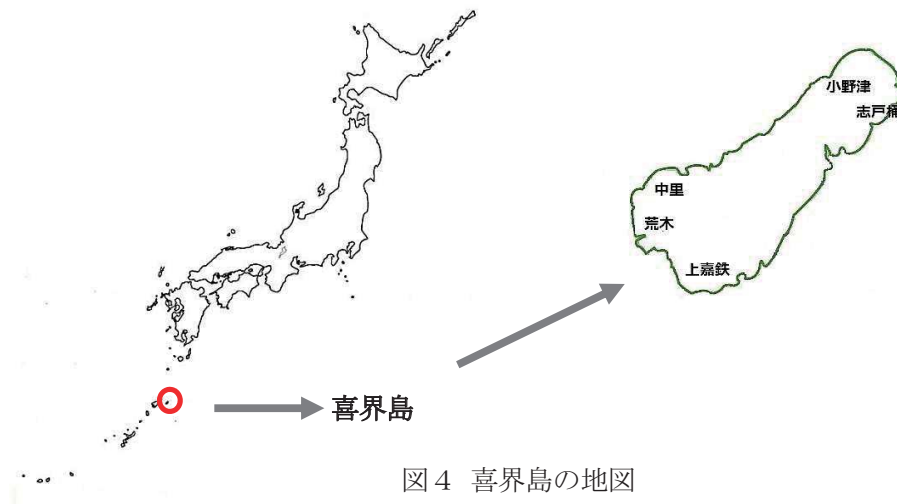


図4 喜界島の地図

表1を見ると、北部の小野津や志戸桶ではアンマーが「お婆さん」の意味で使われ、南部の中里や荒木、上嘉鉄ではアンマーが「お母さん」を指したり「お婆さん」を指したりする。「お母さん」がアンマー～オツカン、「お婆さん」がアニー～アンマーのように揺れることもある。揺れの中に出てくるオツカンは、鹿児島県本土で広く「お母さん」の意味で使われることは、アニーは「姉」に由来し、徳之島ではアンネー、アの形で「お婆さん」の意味で使われる。おそらく、古くは「お母さん」をアンマー、「お婆さん」をアニーと言っていたが、新しく「お母さん」の意味のオツカンが鹿児島から入ってきたために、アンマーが「お婆さん」の意味にスライドしたのではないかと思われる(図5)。

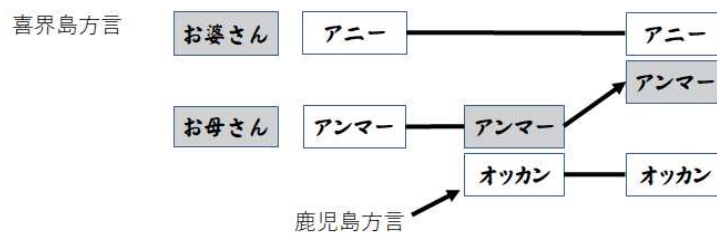


図5 喜界島方言の「お母さん」「お婆さん」の変遷

親族名称が外から入ってきた新しいことばに取って代わられるのはよくあることで、日本でも江戸時代、江戸の中層階級以上の子は父親をオトツァン、母親をオッカサンと言い、庶民の子は父親をチャン、母親をオッカアと言った(『守貞漫稿』1837~1867)。明治時代になると学校教育の影響でオトーサン、オカーサンになり、1945年以降は英語の影響でパパ、ママになった。ただ、日本語では新しい語形を受け入れたときに、元からのオッカアやオカーサンが「お婆さん」の意味にスライドするようなことがない。この違いはどこから来るのだろうか。それは、日本語には鈴木孝夫(1973)のいう「親族名称の虚構的用法の第二種」があるためだと思われる。

「親族名称の虚構的用法の第二種」とは、「家族の最年少者を規準にとり、呼びかけられる人あるいは言及される人物が、すべてこの最年少者から見て、なんであるかを表わす用語で示される」(鈴木1973:172)というルールである。たとえば、夫が妻をオカーサンと言ったり、自分の母親をオーバーチャンと言ったりするのは、家族の最年少者=子どもに心理的に同調して、子どもが使う用語を使うためである(図6。実線が実質的な用法、点線が虚構的用法)。新たに赤ん坊が生まれたときには、一時的に〈二人オカーサン状態〉が生じるが、このような状態は、「親族名称の虚構的用法の第二種」のルールにしたがって、元からの母親(赤ん坊から見て祖母)をオーバーチャンと呼ぶことによりやがて解消されていく(図7)。これに対し、喜界島方言では〈二人アンマー状態〉が生じたときに、鹿児島本土から取り入れたオッカアが母親の位置に座り、元からの母親(赤ん坊から見て祖母)のアンマーが残った(図8)。このことは、喜界島方言には「親族名称の虚構的用法の第二種」ではなく、別のルールが働いていることを示唆している。それはどのようなルールなのか。

じつは、喜界島方言では「母」と「祖母」だけでなく、「父」と「祖父」、「兄」と「夫」と「父」、「姉」と「母」も同じ語で呼ばれる。『喜界島方言集』(1941)には次のような記述がある。

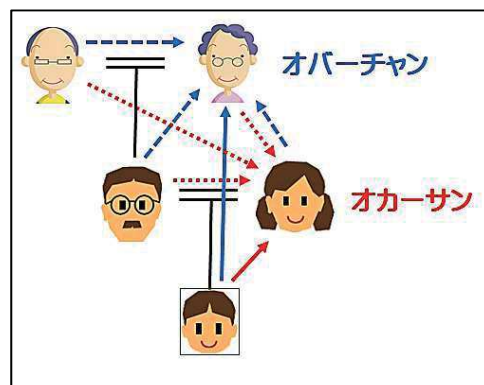


図6 親族名称の虚構的用法の第二種  
(鈴木1973を元に作成)

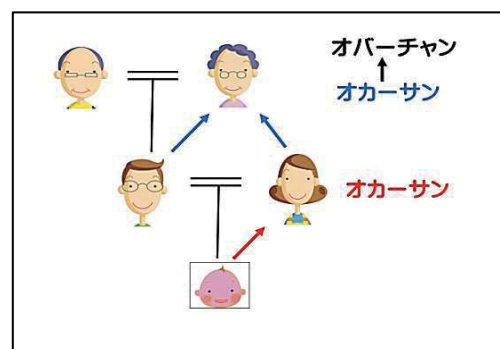


図7 二人オカーサン状態

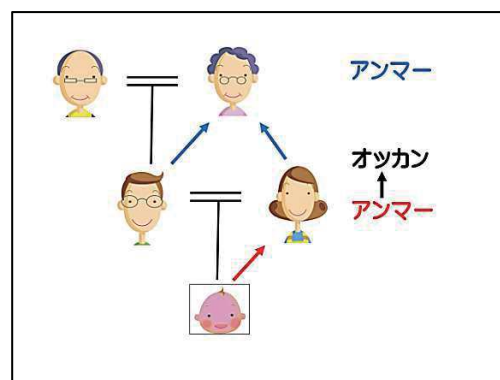


図8 二人アンマー状態



- アンマー 母。家に依っては若い母をイナンマーと呼び、祖母をアンマーと呼ぶ。  
 アチャー 父。又家庭に依っては若い祖父をかく呼ぶことがある。  
 ヤッキー 兄。若い夫婦間では妻が夫を呼ぶにも用い、又若い父を子どもが斯く呼ぶ事も多い。  
 イナンマー、インマー（浦） 姉。また年下の者が中年までの女を呼ぶ場合にも用いる。家庭によっては若い母をその子達が斯く呼ぶ。

2012年の国立国語研究所の調査では、これらの語が集落によって意味を異にしながらい下のように分布している。

- アチャー 「父」の意味。小野津, 志戸桶, 塩道, 上嘉鉄  
 「祖父」の意味。坂嶺, 中里  
 ヤッキー (jakkë:, jakki:) 「父」の意味。志戸桶, 塩道, 阿伝, 湾, 中里  
 「兄」の意味。小野津, 坂嶺, 阿伝, 上嘉鉄, 荒木  
 イナンマー 「姉」阿伝 (古)

このうち、アチャーに関してはアンマーと並行的な変化が考えられるが、ヤッキーが「兄」と「夫」と「父」を表し、イナンマーが「姉」と「母」を表すのはどういうメカニズムなのだろうか。

まず、ヤッキーは『沖縄語辞典』に「jaQcii 兄。にいさん。士族についていう。」とあることから、もとは「兄」を表していたと考えられる。それが「兄」から「夫」へ、「夫」から「父」へと意味をスライドさせていったわけだが、その背景には、男性の年長者を〇〇ヤッキー（〇〇には名前の最初の2音が入る）と呼ぶ習慣の存在があったと思われる。昔は、集落内の幼なじみ同士で結婚することが普通だった。〇〇ヤッキーと呼んでいた相手がある日、夫になる。そのときに、結婚前の呼び名が結婚後もそのまま使われるということは、容易に推測できる。また、子どもが生まれたときに、その子どもが母親のことばをまねて、父親をヤッキーと呼ぶようになったということも、容易に推測できる。そうやってヤッキーが「父」の意味になったのであろう（図9）。

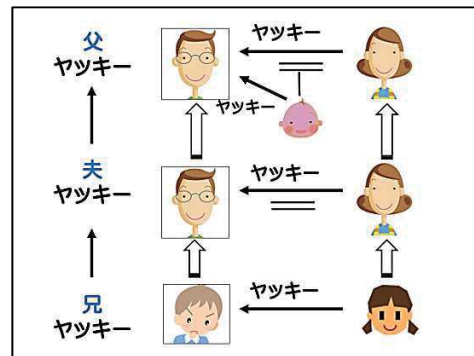


図9 喜界島方言のヤッキー

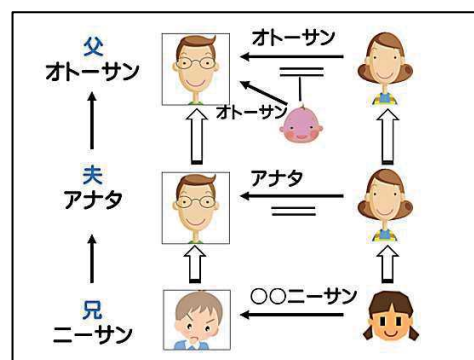


図10 日本語の呼称

ここで重要なのは、似たようなことはどの地域でも起こりうるが、日本語では「兄」を表す語が意味をスライドさせて「夫」や「父」を表す語として定着することがないという点である（図10）。日本語には「親族名称の虚構的用法の第二種」のルールが働いているので、最年少者が変わるたびにその人の呼称が ニーサン>アナタ>オトーサン>オジーサ

ンのように変わっていく。それに対し、喜界島方言では最初の名称が固有名詞のようにその人に張り付き、家族構成が変わってもそれが変わらない。このようなシステムが奄美・沖縄に一般的なのか、日本語諸方言の中にこのようなシステムを持つ方言がないのか、日琉祖語のシステムはどうだったのかなどは、これからの課題である。

### 3 沖縄県与那国方言の「お兄さん」と「お姉さん」

次に、兄と姉の呼称を見てみよう。標準語では、オニーサン・オニーチャン、オネーサン・オネーチャンで、次男が呼んでも三男が呼んでも、妹が呼んでも弟が呼んでも変わらない。ところが、沖縄県与那国方言では、誰が呼ぶかによって呼び方が異なる。

長男を 次男が呼ぶとき           スナティ  
           三男以下が呼ぶとき       ウブダ  
           すぐ下の妹が呼ぶとき     ビヤティ  
           その下の妹が呼ぶとき     ウビヤ  
 長女を 次女が呼ぶとき・すぐ下の弟が呼ぶとき   アティ  
           三女以下が呼ぶとき・その下の弟が呼ぶとき   ウバニ

池間苗氏の『与那国ことば辞典』と『与那国語辞典』を参考にして兄・姉の呼び方をまとめると、次のようになる。

表2 与那国方言の兄の呼称

	弟から		妹から	
長男	ウブダ	すぐ上の兄は スナティ	ウビヤ	すぐ上の兄は ビヤティ
次男	ナグダ		ナガビヤ	
三男	ナグダティ		ナガビヤティ	
四男	ウブスナティ		ウブビヤティ	

表3 与那国方言の姉の呼称

	弟・妹から	
長女	ウバニ	すぐ上の姉は アティ
次女	ナカ° ニ	
三女	ナカ° ニティ	
四女	ウブアティ	

(カ° は鼻濁音を表す)

ポイントは3つである。一つめは、長男・長女、次男・次女、三男・三女……に固有の呼称があること、二つめは、男が男の兄弟（兄）を呼ぶときと、女が男の兄弟（兄）を呼ぶときとで異なる語形が使われること、三つめは、長男、次男……を表す語とは別に、すぐ上の兄・姉を呼ぶ語があることである。

まず、長男・長女、次男・次女、三男・三女……の呼称について。表2を見ると、それぞれは次のような形態素の組み合わせで出来ている。

表4 与那国方言の兄・姉の呼称の語構成

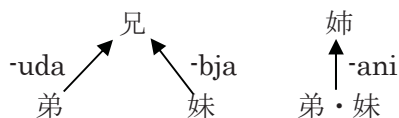
	語根	男 (兄←弟)	男 (兄←妹)	女 (姉←弟・妹)
1 番目	ubu-	-uda ウブダ	-bja ウビヤ	-ani ウバニ
2 番目	naga-	-uda ナグダ	-bja ナガビヤ	-ani ナガニ
3 番目	naga-	-uda+ti ナグダティ	-bja+ti ナガビヤティ	-ani+ti ナガニティ

表4を横に見ると、1番目(長男, 長女)に共通する語根は **ubu-**、2番目(次男, 次女)、3番目(三男, 三女)に共通する語根は **naga-**である(表3では、次女、三女の呼称に鼻濁音の **カ** が使われているが、これは後接する **-ani** の **n** の影響で語根 **naga-**が **naja-**に変化したものと考えられる)。**ubu-**はウブカディ(台風)、ウブキ(大樹)、ウブクイ(大声)などのウブと同じで「大きい」の意、**naga-**は「中」の意を表す。

次に、表4を縦に見ると、弟から見て兄を表す語に共通に現れる接辞は **-uda**、妹から見て兄を表す語に共通に現れる接辞は **-bja**、姉を表す語に共通に現れる接辞は **-ani** で、三男、三女の呼称には、それに **-ti** が付いている。**-uda** は「年上」を表す **suda** に由来するのではないと思われる。**-bja** についてはよく分からないが、柴田(1988)によると、「男」を表す「ビンガ」の「ビ」に「父親」を表す「イヤ」が付いたものではないかという。**-ani** は「姉」、**-ti** は指小辞「ちゃん」に当たる語である。

以上を組み合わせると、長男・長女は「大きい兄さん」「大きい姉さん」、次男・次女は「中の兄さん」「中の姉さん」、三男・三女は「小さい兄ちゃん」「小さい姉ちゃん」のような意味になる。これは、それほど珍しい呼称というわけではない。

日本語と大きく異なるのは、男の兄弟(兄)を弟が呼ぶときと妹が呼ぶときとで異なる語形を使う点である。姉を呼ぶときには、弟も妹も **-ani** (姉) を使っているので、異性間の呼称の問題というよりも、妹が兄を呼ぶときに限り、特別な呼称が存在するというのが与那国方言の特異な点である。



このときに使われる接辞 **-bja** は、上述のように、由来がまだよく分からない。ただ、「妹→兄」の呼称を特別な形式で表現しなければならないような文化的、社会的、歴史的必然性があったことは事実である。これについては、多方面からのアプローチが必要なので、ここではこれ以上述べないが、ことばの構造面からみると、与那国方言には「弟→兄」「妹→兄」「弟・妹→姉」の3つの枠組みが設定されているということを指摘しておく。

さらに日本語と異なる点は、すぐ上の兄・姉を呼ぶ語が特別に存在している点である。この節の最初に「次男が長男を呼ぶとき」にスナティを使い、「すぐ下の妹が長男を呼ぶとき」にビヤティを使い、「次女が長女を呼ぶとき」や「すぐ下の弟が長女を呼ぶとき」にアティを使うと書いたが、これらはいずれも、すぐ上の関係にある兄弟を呼ぶときの呼称である。スナティ、ビヤティ、アティに共通する接辞ティは、三男、三女の呼称に付く接辞の **-ti** と同じもので、指小辞「ちゃん」に当たる語である。その前の部分のスナは **suda** (年上)、ビヤは由来が分からないが、妹が兄を呼ぶときの接辞 **-bja** と同じもの、アは **ani** (姉) だと考えられる。やはり、「弟→兄」「妹→兄」「弟・妹→姉」という3つの枠組みを基盤に



しつつ、長男・長女，次男・次女，三男・三女……とは別に、すぐ上の兄・姉を呼ぶ語が設定されている。このような枠組みを必要とする文化的，社会的，歴史的背景があったものと思われる。

残ったのが，四男・四女のウブスナティ（弟→兄），ウブビヤティ（妹→兄），ウブアティ（弟・妹→姉）である。これらは次のように分析することができる。

ウブスナティ：ウブ（大きい）＋スナティ（弟から見てすぐ上の兄）  
 ウブビヤティ：ウブ（大きい）＋ビヤティ（妹から見てすぐ上の兄）  
 ウブアティ：ウブ（大きい）＋アティ（すぐ上の姉）

家族の中でもずっと年下の四男・四女にウブ（大きい）や「すぐ上の兄・姉」を表す形式が組み込まれているのは不思議である。これは，どのような命名法に基づくものなのだろうか。おそらく，「すぐ上の兄・姉」を表す形式が含まれているということは，逆にいうと，「すぐ下」が想定されているのではないと思われる。四男・四女に対してスナティ，ビヤティ，アティが使えるのは，そのすぐ下の五男，五女である<sup>注</sup>。ただし，ウブ（大きい）という形態素が付いているので，それよりもさらにさらに下，つまり，六男，六女を想定した命名法ということになる。

（四男・四女　ウブスナティ，ウブビヤティ，ウブアティ  
 （五男，五女　スナティ，ビヤティ，アティ  
 （六男，六女

ただし，四男・四女が生まれた段階では，まだ六男，六女が生まれていない（生まれるかどうかはわからない）ので，あくまで「六男，六女がいればそう呼ぶであろう」という想定のもとに成り立つ命名法である。もし，このような推測が正しいとすれば，与那国方言には，前節で取り上げた鈴木（1973）の「親族名称の虚構的用法の第二種」（家族の最年少者を規準にとり，呼びかけられる人あるいは言及される人物が，すべてこの最年少者から見て，なんであるかを表わす用語で示される）の原理が適用されていることになる。ただし，本当に「親族名称の虚構的用法の第二種」の原理が与那国方言に存在するのかどうかは今後の調査にまたなければならない。

## 注

同性同士の兄弟ならば，「四男・四女にスナティ，ビヤティ，アティが使えるのは，そのすぐ下の五男，五女である」と言えるが，異性同士の兄弟の場合は，必ずしもそうは言えない。たとえば，「男1，男2，男3，男4，女1」のような兄弟で男4にビヤティを使うのは女1であり，四女ではない。また，「女1，女2，女3，女4，男1」のような兄弟で女4にアティを使うのは男1であり，四男ではない。ここでは議論を単純化するために，同性同士の兄弟に限定して説明を行なっている。

## 引用文献

- 間苗著, 池間龍一・池間龍三編 (1998) 『与那国ことば辞典』私家版
- 池間苗著, 池間龍一・池間龍三編 (2003) 『与那国語辞典』私家版
- 岩倉市郎著・柳田国男編 (1941) 『喜界島方言集』中央公論社 (国書刊行会一九七七の復刻による)
- 木部暢子他 (2011) 「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書」国立国語研究所
- 木部暢子 (2013) 『じゃっで方言なおもしとか』岩波書店
- 木部暢子 (2014) 「奄美喜界島方言の親族語彙—お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さん—」『国語研プロジェクトレビュー』5(2), pp.57-67
- 木部暢子 (2018) 「消えゆく言語・方言を守るには」『國學院雑誌』第119巻第11号
- 国立国語研究所編 (1963) 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- トマ ペラルル (2013) 「日本列島の言語の多様性」田窪行則編『琉球列島の言語と文化 その記録と継承』くろしお出版
- 柴田武 (1988) 「与那国方言における兄弟姉妹の呼称」『語彙論の方法』三省堂, pp.299-307
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書
- 中本正智 (1983) 『琉球語彙史の研究』三一書房
- 文化庁 (2015~2017) 危機的な状況にある言語・方言サミット  
([http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/summit/index.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit/index.html))
- 文化庁委託事業 (2011~2015) 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究及び危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究  
([http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/jittai\\_chosa/index.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jittai_chosa/index.html))
- Chambers, J. K. and P. Trudgill (1980) *Dialectology*. Cambridge University Press.

## 付記

本稿は、2016年2月2日に行なったCAAS&NINJALユニット合同セミナーでの講義の内容に修正を加えて作成したものである。この研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の研究成果の一部である。